

Title	眞澄遊覧記「伊那の中路」「來目路の橋」「わがこゝろ」、柳田國男校訂
Sub Title	
Author	有賀, 春雄(Aruga, Haruo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.157(665)- 158(666)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0158

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

洋人日本探檢年表

(橋内曾次郎編)
岩波書店發行

史學を研究するもの、常に手離すことの出来ないものは年表である。我國に於ても古くより多くの年表が作られ一般に用ひられてゐるが、此等は何れも少い紙數の中に長い時代にわたる事實を記載するものであるからして、各年最も重なる事件のみを記述するに止まる位のものである。従つて一般に用ふるには便利であるが特殊の方面又は限定された時期の研究に用ふるには甚だ不便である。それ故に此等の要求に應ずる爲に特別の年表が必要となるのであつて史學の研究が益々盛となり、多くの分科を生ずるに従つて此の傾向は甚だしくなるのである。近頃にも或は維新後大年表或は洋學年表の如きものが多く出版されるに至つたのも此爲である。本書も又かゝる特別の年代に屈することは言ふまでもない。

著者橋内氏は海將にして愛史家であり、前年英京に滞在中、歐米人の日本に關して著した探檢誌、航海記、見聞録、風土志及び其他の各種の研究資料を蒐集し記録し歸朝後之等を整理して一冊となして刊行した。即ち氏が洋人日本年表の初版本であるが氏は極めてわずかの部數で同好の士に頒たれたものであつた。其後十數年の間氏は更に多くの東西の史書を博搜し舊作の年表を増訂され、又近來南蠻吉利支丹本が多く出顯することとなつたので益々氏の年表が必要となつた爲に本書を出版することとなつたのである。

本書の記事記載の方法は、すべて横書きであつて、初めの二面は日本書よりの記事にあつて、右端に日本年號を記し、次の二面は洋

書よりの記事にあつて左端に、日本年號に相當する西曆を記し、間にはさまるゝ頁を短くして日本側の記事を見る場合にも西曆が分る様になつてゐる。而して記事には各々引用書を記し、又重要な事件に就ては詳細なる脚註をほどこしてゐる。本書に記してある年代は西曆千五百年以前は極めて少く、約二頁一千五百年より千八百七十五年(明治八年)までが大部分(九十二頁)をなしてゐる。更に海軍歴史の小笠原島記事、水戸の快風丸到石狩川口記事、異船打拂令の消長、露人の千島諸島來侵、露領及北米漂流者一覽表、ヘルリ艦隊訪日遠航行動表、濠洲の發見、洋人日本探檢書籍目錄、鐵炮記を冊尾附録とし、最後に索引を添へてゐる。

本書は此を使用する場合に他のものに比して少しく不便であり且つその引用書に於ても充分でないとするも、兎に角歴史専門家でない著者の努力に依てかゝる特殊な年表が作られた事は實に喜ぶべき事である。本書がかゝる方面の唯一の年表として當然史學家讀者の座右に備へらるべきものであらう。(今宮新)

眞澄遊覽記

「伊那の中路」來目録の橋「わがこゝろ」

柳田 國男 校訂

菅江眞澄、本名白井秀雄翁は東三河の或る神社の神職の子であつて、天明の初頃から旅に出て、片雲の風にさそはれて轉々と漂泊の生涯を信濃路や東北の空に送つて、文政の末に旅に歿した遊歴文人であつた。眞澄遊覽記は即ちその紀行文の全體であつて、柳田先生の調査によれば、眞澄翁の遊覽記と稱するもの凡て七十

二篇あつて、その中の十九篇は書名のみ知られてゐて實物の存否不明のものであるといふ。

百餘年を溯つた當時に於いて、都を離れた僻遠の地の未知の山川や地方民に對する厚意に満ちた觀察の記録が、その地方に住する現代の人士にとつて深い感興であるのは當然である。「伊那の中路」「來目路の橋」「わがこゝろ」は、何れも遊覽記中の信濃に關する記録であつて、東北研究に造詣深い柳田先生によつて校訂せられ、活版本として世に出されるに至つたことは、少くとも信濃に郷里を有する者の感謝であり、又弘く歴史に興味を寄する者の喜悅でなければならぬ。

白井秀雄翁が何れの目的を以て旅に志したか、家出をしなければならぬ理由が奈邊に存したかは、その家の歴史と共に不明であるが、兎に角「北邊の雪の底に隠れて、四十餘年の孤寂生涯を味却すべく運命づけられたる天才であつたことは、「わがこゝろ」の附録なる柳田先生の「遊歴文人のこと」の一文に詳説されてゐる。又「彼の文章は巧みに古文の骨法を把へてはゐるが、一派の學匠に就て陶冶せられた痕が無いのみならず、往々にして曲亭一流の讀み本の感化を認めるのは、恐らくは刻苦自修の人であつたこととを語るものであらう」とも考證せられてゐる。和歌の鑑賞に盲なる筆者は、その巧拙を論ずる資格はないが、感興の湧くがまゝに詠み込まれた無數の和歌は、翁が此の道の達者であつたことを物語り、又その交遊の士の中にも和歌の心得のある者が多かつたやうである。

天明の初から文政の末といへば、江戸の繁榮はその頂點に達し

た時代であつて、藝才ある者は多く都會に集り、國を憂ふる輩は漸く尊王を説いた時代である。然るに眞澄翁の如き篤學の士が遂に都に向つて情を寄せず、風物の枯れて徒らに寂しい北國に歴遊を續けたのは解し兼ねる不可思議である。然し此の不可思議の中に眞澄翁その人を窺ふべきである。彼が後世に對する何等の計畫もなく、旅にあつて書き誌した此の旅の記録が、知識の價値の極度に低下した昭和の今日、期せずして心ある人の感激を以て報いられやうとは、翁の夢にも想像しなかつたところであらう。(有賀春雄)

日本思想史 上代國民の精神生活 (清原貞雄著 中文館發行)

本書は著者が曩に公にせられた「日本國民思想史」を基礎として上代固有思想の時代に就て論評を試みられたものであつて、引續いて世に現はれんとするもの、第一編である。

著者は先づその序に於て近頃やかましい思想問題を解剖し、國民の思想の悪化は自國文化に對する無理解に基くものと脱まれ、たゞに研究の興味といふ個人的の問題からばかりでなく、國民の思想問題といふ社會的、實際的問題からいつても自國文化特に大陸文化の影響を受けぬ以前に固有文化を闡明するといふ事の必要である事を力説せられ、次にその研究の方針及び目的として純粹固有文化の時代即ち大陸文化特に儒教を輸入する以前に於ける我國國民の生活に就ては徳川時代に二種の見解——儒學者のそれと復古國學者のそれと——があるが、何れも極端に走り過ぎて正